

遠藤周作の自然描写Ⅲ

The description of the weather by Endo Syusaku Ⅲ

中 村 国 男

NAKAMURA Kunio

遠藤周作 自然描写 ヘチマくん

Endo Syusaku weather Mr Hetima

概 要

作家遠藤周作は、大衆小説第一作の「おバカさん」において主人公ガストン・ボナパルトに夜空に輝く星の描写を多用し、大衆小説第三作の「私が・棄てた・女」では主人公森田ミツに雨の描写を多用した。そして主人公の夢や憧れ、悲しみや切なさなどを見事に表現してきた。ところで大衆小説第二作の「ヘチマくん」においてはどうか。ここでは晴天・太陽・陽射しの多用が見られる。それによって主人公ヘチマこと豊臣鮎吉の不細工で呑気だが、屈託がなく善良な人柄を描いている。ただし、主人公が憧れの女性との、おそらく最後の対面になるであろう場面では切なそうな雨を設定している。このように遠藤周作は基調となる天気を主人公に設定してキャラクターづくりをした上で、状況に応じて天気を変化させることによって、主人公の心理の変化をも巧みに描いている。

この論文では、「ヘチマくん」の概要を紹介した後、主人公の描き方、及び脇役のうちの重要人物典子の描き方を論じた後、論文の主題である、この小説に表れている自然描写の見事さについて紹介してゆく。

はじめに

過去二年連続して、私は本学の「紀要 第四十五号」「紀要 第四十六号」において「遠藤周作の自然描写」なる論文を発表した。そして「紀要 第四十六号」の「おわりに」で次のように述べた。

「この作品が読者の心を打つのは、作者がどんな巧い書き方をしているからなのか」という、作品の作り方と出来栄を論ずる視点による作品分析を、私は今後も続けたいと考えている。差し当たっては、遠藤周作の大衆小説第二弾「ヘチマくん」について機会があったら論文にすべく、作品分析を進めたい。

今回の論文は、これを受けたものである。上に紹介した二つの冊子が手元にない方のため、念のため私のねらいとするとところを簡潔にまとめておく。

遠藤周作（以後、遠藤と呼ぶ）の作品を論ずるとき、論者がまず基礎基本として念頭に置くのは遠藤がカトリシアン作家であり、しかも自身の信仰に居心地の悪さを抱え続けていたということである。確かに日本人の宗教観と西洋人の宗教観、及びそこに底流する歴史・文化の違いに遠藤がいかに苦しみ、作中人物にその悩み苦しみを投影したかは避けて通れぬ問題である。しかし、私に言わせれば、多くの論文は遠藤の宗教観や、キリスト教的倫理観を判断尺度として論ずることに重きを置き過ぎている。遠藤の作品の魅力は、もう一つある。それは作品構成の見事さ、とりわけ季節や天気などの自然描写を生かした作品構成の見事さである。ただし、自然描写と言っても、花鳥風月などの自然そのものを滔々と描写するということではない。ストーリーの展開や登場人物造形の上での大きな効果をねらった、さりげない季節や天気の描写という意味である。これは純文学作品においても言えることではあるが、とりわけ大衆小説において顕著である。

こう判断した私は、「紀要 第四十五号」において遠藤の大衆小説第三作「私が・棄てた・女」を論じ、「紀要 第四十六号」において遠藤の大衆小説第一作「おバカさん」を論じた。

さてこの二作品に挟まれた「ヘチマくん」なる小説はどうか。結論を先に言おう。私が既に論じたような「おバカさん」のガストン・ボナバルトと星、「私が・棄てた・女」の森田ミツと霧雨といった徹底した描写はない。つまり、二作品における極端な描写、「描写過多」に類するものはない。しかし、ここぞという場面で見事なまでの晴天の描写が用いられている。それは後述するように主人公ヘチマこと豊臣鮎吉と、その憧れの女性典子との再会の場面でクライマックスに達すると言ってよい。そしてまた、全体的には晴天の明るい描写が目立つ中で、失業してさまよう鮎吉や、典子と会えなくなった鮎吉などには雲や雨の描写をぶつけてくるなど、遠藤の自然描写は、大衆小説第二作を以て、かなりの余裕を見せてきている。以下、順を追って、「ヘチマくん」の概要、脇役でねらった遠藤の演出、主人公ヘチマこと鮎吉の人間像、「ヘチマくん」の自然描写の順に論じていきたい。

なお、「ヘチマくん」の本文引用に当たっては、学生時代に読んでたくさんの書き込みの残る「角川文庫昭和 48 年 8 月版」を用いたことをお断りしておく。

1 「ヘチマくん」の概要

「ヘチマくん」は 1960（昭和 35）年 5 月から 11 月まで河北新報他の地方新聞に連載された小説である。半年後の 1961（昭和 36）年 5 月、新潮社から単行本として刊行された。先に述べたとおり、遠藤にとって大衆小説の第二作であり、登場人物の多彩さから見ても、彼らの人間関係から見ても、遠藤の大きな作家的成長と余裕を感じさせる作品である。この作家的成長と余裕という点についてはこの後、少しずつ紹介することとし、まずはこの作品の概要を確認しておこう。

主人公は学生時代の悪友熊坂光義からヘチマと呼ばれている独身青年である。本名は豊臣鮎吉。豊臣秀吉が木下藤吉郎と名乗っていた頃、ある女に産ませた子の子孫。その証拠とな

る宝を親戚が所持している。しかし、一介の百姓から身を起こし、太閤にまで上り詰めた男の子孫らしさは全くない。初登場シーンの彼の風貌や動作を具体的に見てみよう。

その坂（論者注 渋谷の道玄坂）を顔の奇妙なほど長い、背もひょろりとした青年が、ひょこ、ひょこ、登っていた。

店のかげや、おでんの屋台の中から女たちは、一度はこの青年に注目したが、その歩きぶり、奇妙に長い、間の抜けた顔つき、さっぱり風采のあがらぬ服装を見て、もうプイと横を向いてしまう。

（第一章 チャッカーリとモッサリ）

この顔立ちからヘチマという渾名がついたのだらうという想像は容易だ。風貌のみならず話し方も「まことにモッサリとして」いる。熊坂は鮎吉を「どこか抜けてて、要領が悪くて」と評する。

鮎吉は勤務先の零細企業が倒産し、わずかな退職金を受け取って途方に暮れて街を歩いているところで数年ぶりに熊坂と再会する。立ち話をして別れた後、鮎吉は銀座界隈で、スリに退職金をすられたり、いかがわしい商売に巻き込まれたり、助けられたり、悪事を手伝わされたりしながら、小説の前半を生きている。

前半最大の見どころは「第十章 あの人は知らず」だろう。熊坂の縁で知り合った銀座のバーのマダム銀子に鮎吉は気に入られ、他店から見どころのあるホステスを引き抜くスカウト役を押付けられてしまう。調子に乗った銀子は鮎吉を自宅のマンションに誘い込む。鮎吉が豊臣秀吉の子孫だという情報を得て利用する下心があったのである。銀子は性的アピールで鮎吉を虜にしようとする目論み、鮎吉の手を握って身体を擦り寄せる。

その時である。

「無礼者！」

銀子の耳がつぶれるほどの大声だった。この大喝を浴びせられた途端仰天した彼女はガンとソファの背に突きとばされたのである。

（第十章 あの人は知らず）

銀子のマンションを飛び出した鮎吉は、日頃鈍感、鈍重な自分がなぜあんな怒りの声を出せたのだらうと振り返る。鮎吉によれば、「茶筌に髪をむすび、顎にながい白鬚をはやし、眼光炯々とした一老人の貌」が自分の眼に浮かび、自分の口を借りて「無礼者」と叫んだのだという。この老人が豊臣秀吉であることは読者の誰もが連想することだろう。遠藤の御愛嬌であり、読者サービス、ファンサービスである。これは遠藤の作家的成長の一端を披露するものでもあると私は考える。

後半に進もう。こうしてせっかく手に入れかけた仕事をふいにして、再び失業者に戻った鮎吉は、救いを求めてドクダミ熊坂を訪ねる。折しも熊坂は桜島観光開発を目論み、まずは桜島の古市、辰島集落の土地を買い占めようとしていた。そこは大阪で敗北した豊臣方の末

裔が暮らす村である。だからその村民を巻き込んで、少しでも安く土地を買い占めるには、豊臣秀吉の子孫である鮎吉の権威が欠かせない。熊坂は鮎吉を伴って桜島に向かった。

ところが、熊坂はよせばいいのに、その前に銀子にこの計画をしゃべってしまったのだ。したたかな悪女、銀子がこのおいしい話を放っておくはずがない。彼女はパトロンに金を出させて、熊坂と同時期に桜島に乗り込み、村民との契約を取り付けてしまい、熊坂を敗北させる。

その数日後、桜島が間も無く噴火する恐れがあるとの記事が新聞に載り、二人は胸を撫で下ろしながら東京に帰る。鮎吉が銀子の経営するバーを訪ねてみると、「四、五日の間、休ませていただきます」との貼り紙があった。鮎吉はここ数日の経験を振り返る。

鮎吉は今、自分をとりまいている赤、白、黄のネオンの渦の背後に、今一つ、もっとギラギラした生活の渦が烈しく巻いているのを感じた。

その渦のなかで自分はヘチマのように、ぶらん、ぶらんと生きてきたのである。おそらく自分のようなやり方は、他人の眼からみると、余りに間のぬけた、底のない生きかたにみえるかもしれぬ。しかし鮎吉はどうしても他の人々のようにこうした生活の渦の中に走りまわるのが好きではなかった。それよりも夢をみながら哀しい表情をしても、ふわん、ふわんと波のまにまに漂う生き方が性にあっていっていた。

(第二十章 虹のように)

ここまで来ると、ヘチマという渾名は、鮎吉の顔つきの形容であるだけでなく、鮎吉ののんびり、のんびりとした生き方の形容でもあることが分かる。鮎吉を取り巻く人物たちのほとんどが、一獲千金を夢見、あるいは他者の利益を掠め取って我が物にしようと必死になっている中で、ヘチマくん鮎吉は、のどかにさわやかにこれからも生き続けるのであろうと読者の期待を掻き立てつつこの小説は終わる。こういった粗筋である。

ここまで、粗筋と併せて主人公鮎吉の容姿・境遇・生き方について、最低限の説明をしてきた。第二章では、鮎吉の性格や人生観をさらに掘り下げていくこととする。また、この小説の面白いところは、主人公ヘチマこと豊臣鮎吉以外にも、ドクダミこと熊坂、鮎吉の初恋の女典子、銀座のバーのマダム銀子など、脇役たちの生き方や考え方がしっかりと描かれており、それぞれが主役を張れるほどである点である。しかし、この三人の脇役についてすべて論じていくと、あまりに紙数がかさみ、遠藤の自然描写に関する論考が後ろに行き過ぎてしまう。涙を吞んで、一人に絞って、第三章で見たいこう。

2 鮎吉の性格や人生観

小説の始めから間も無くのところで、久しぶりに再会したドクダミ熊坂にヘチマ鮎吉が自分は会社の倒産により失業してしまったということをきまり悪そうに話す場面がある。一般的に失業は人生の一大事であり、明日からどうやって生きて行こうか、それハローワークだ、求人情報誌だと目の色が変わる状況であろう。しかし、鮎吉の態度はあまりに暢気すぎる。次に紹介するのは失職の当日夜、アパートに帰った時の鮎吉の思いである。

(明日からは何をして……)

明日から次の仕事を見つけねばこのアパート代はとも角として一週間もたたぬうちに三度の食事にも困ることなど、一向に念頭におかない鮎吉なのである。

とも角、あすはうんと寝坊をする。

それから朝風呂にでかけてやろう。

この二つだけで彼の心はすっかり幸福感に充された。

(第二章 銀座)

いかにも大衆小説の主人公らしい設定である。発表当時の読者には「おバカさん」のガストンの再来かと感じた人も多かったことだろう。さて、鮎吉は呑気なだけではない。実に生き方が場当たりの無計画なのである。次に引用するのは失職した翌日、銀座で虎の子の退職金をすられ、アパートに帰るに帰れず、有楽町駅で一晩過ごすはめになった場面である。

ポケットの中には一円の金もなかった。こういう場合交番に事情をはなし、金を借りるという方法もあろうが、さきほど刑事にばけた一件があった手前、なにか警官にものを頼むのも気が進まなかったのである。

(まあ、ええわ)

生来、楽天的な彼は口にヒョイと昔、おぼえた流行歌の一節がうかんできた。

なるようにしかならないわ

悲しくしずむ夕日でも

あしたになれば昇るのよ

(第五章 なるようにしか)

「刑事にばけた」というのは、もちろん鮎吉のアイデアではない。銀座で偶然出会い、少々の飯をおごってくれた男から、いかがわしい仕事の片棒をかつがされた結果なのである。ここに登場した流行歌の一節は、いわば「鮎吉のテーマ」といってもよいほどに、この作品の随所に登場する。

こうして鮎吉は、生活力のないだめ男、しかし薬にならない代わり、毒にもならないところが救いという程度に描かれ始めている。しかし、鮎吉の性格は見方を変えれば、多くの現代人がせちがらい世の中を渡ってゆく過程で失いつつある性格であることが、次第に読者に分かってくる。鮎吉は愚直である。信じられないほどの馬鹿正直で、自分を有利に世間に売り込むことを知らない。次の場面は、鮎吉が豊臣秀吉の子孫と知った銀子が、鮎吉を利用して、素性の確認を強いるところである。

「ねえ、あなた。でもあんたの家のほかに秀吉の血すじは今、どこにもいないんなら……あなたが直系といってこまるわけじゃないのね」

「いや、こまるです。本当にボクは直系やないのです」と鮎吉は眼をしばたきながら首をふった。「今も言いましたように、ボクんとは、秀吉さんやなくて、むしろ藤吉郎のほうの家系なんですから……」

「馬鹿ねえ。少し頭をお働かしなさいよ。なにもそこんところを正直に人に言う必要はないのよ。秀吉の直系だと言ってごらんなさい」

(第十章 あの人は知らず)

この場面の直後、この論文の第一章で紹介したように、鮎吉を性的に誘惑し始めた銀子に対して、鮎吉の中の祖先の魂（それはあたかも豊臣秀吉そのものと思われるように、遠藤が演出している。）が一喝することになる。

上記の直系云々の場面の少し前でも、鮎吉は「アパートにつれこんで彼の目の前で入浴をされたり、白いふくらはぎをみせつけられたりするような目にはもうあまりあいたくない」と考えている。ドクダミ熊坂をはじめ、銀子に群がる男たちが、あわよくば銀子を口説き落としてベッドイン……と企んでいるのとは大違いであり、鮎吉の正直さと潔癖さはひと際光っている。

以上、鮎吉の性格について何点か挙げてきたが、次に紹介するのは人生観と言ってもよいほど、鮎吉の人格の重要なポイントである。鮎吉は八年前の学生時代に見初めた初恋の少女典子が今では人妻であり、その夫鮎川がいかにも羽振りの良い人物であるかを知る。鮎川は父親が起こした一流企業の副社長なのである。そして典子が肺を患って鎌倉の病院に入院中、銀座のバーのあちこちでホステスやママと遊びまくっているのである。次の場面での鮎吉は仕事をあげるという銀子に巻き込まれ、他店のホステスを引き抜くために、あるバーに来ている。

いかにも若い副社長という気どりと得意さが少し長身の彼の体から発散していた。

「ドン・ファンよ。あの人」

鮎吉の耳に横にいた女の子が小声で囁くと、ちょっと羨しそうにそのボックスを眺めた。

(これがあの人が結婚した男か)

鮎吉は半ば感心し、半ば不安だった。一体この男は病気でねているあの人のことをどう考えているのだろうか。

本当に心配なら、こんなバアでお酒をのんだり、おどったりできるだろうか。本当に妻を愛しているなら暇を利用して療養所まで車をとばし、見舞ってやるはずだ。

(彼女も倅せじゃないのかもしれん)

(第八章 虹色の貝)

のんびり屋の鮎吉にしては、まれに見る推理と考察である。人に見つからないのをいいことに人を裏切る行為は許せない。「なるようにしかならないわ」という流行歌を愛する呑気で場当たりの、とても人生のポリシーなど持ち合わせていないかのような鮎吉も、人を欺く行為は絶対に許せないのである。この小説は「おバカさん」と比べて娯楽性が強く、主人公を比較してみても、鮎吉にはガストンのような人生の一隅を照らすといった志が見られない。しかしながら、ここに至って読者は遠藤がやはり、この下らなそうな主人公鮎吉にも確かな思いを寄せ、人の在り方を巡る遠藤自身の期待や願いを籠めて登場させていることを知る。

鮎吉の初恋の女典子が話題になったところで、第一章の最後で予告したとおり、この小説

の様々な脇役の魅力について、典子のケースを見ていくことにしよう。

3 脇役でねらった遠藤の演出・・・典子を巡って

鮎吉と典子の出会いはこうである。大戦中の物資不足と統制下に学生時代を過ごしていた熊坂は、寮で同室の鮎吉の親戚から苺を買い取り、闇で東京銀座の一流フルーツパーラーに売りつけ大儲けしようと企み、鮎吉を巻き込む。この企みは失敗に終わるが、鮎吉は店先でかわいい少女と出会い、売れない苺を上げてしまう。典子というこの少女は鮎吉の心に残り続け、初恋の人となる。八年後に鮎吉はこの女性の消息を知る。彼女は一流企業の副社長の妻となり、今は鎌倉の病院で療養中であった。鮎吉は彼女が自分のことを覚えていないだろうことを承知で彼女の見舞いに行く。彼女との再会、別れがこの小説の最重要の骨格となっている。再会や別れの場面は、鮎吉にまつわる自然描写と合わせて、遠藤はかなり力を入れて書いている、と私は見た。この点については、後に一章を費やして詳述する。ここでは出会いの場面と、八年後も続く片思いを確認しておこう。

背後の店員の一人が、

「店の前にたたれると邪魔なんですネエ」

そんなことまで言ったのである。

その時だった。国民服を着て、ロイド眼鏡をかけた恰幅のいい紳士が、

「どうしたんだ」

紳士の横には十七、八の少女が立っていた。色の白い、眼の大きな少女だった。その上、ふさふさとした髪の色があまり黒いので顔の白さが余計に目立つ感じである。彼女はポカンと口をあけて自分を見ている鮎吉に気がつく可哀しそうに下をうつむいて微笑んだ。

(第一章 チャッカーリとモッサリ)

この後、熊坂が店内に入って、ロイド眼鏡の紳士、すなわち典子の伯父である副社長と交渉している間に、鮎吉は典子に苺をあげてしまうのである。さて次に紹介するのは八年後の片思いシーン。鮎吉はその後の典子とは全く会っていない。だから片思いと言うよりも単なる憧れの思いと言った方がよいだろう。

(おれの奥さんになる娘、どんな人やろうな)

鮎吉も年ごろであるから、こういうことを考えないでもない。自分のように余り世間から相手にされぬ男にも、嫁になってくれる女性が、ひょっとすると広い日本の中には存在するかもしれない。

(中略)

鮎吉はこんな時、いつもあのセンブキ屋のお嬢さんの顔を思い出すのだった。なぜか知らないが、たった一度しか見たことのないあの八年前の微笑んでいたやわらかい白い横顔の線が、目ふたの裏にふっと浮かんでくるのだった。

ところが、ほどなくして鮎吉は典子の消息を知る。それは上に紹介したとおりである。典

子は鎌倉で入院中。夫の鮎川はろくに見舞いにも行かないで、仕事の傍ら、銀座のバーで遊びまくっている。一方、鮎吉は典子がもう自分を覚えてはいないことを承知の上で見舞いに行こうと考える。遠藤の演出がここで冴えわたる。不実な夫、鮎川。典子にたった一度会っただけの鮎吉、この二人の生き方の相違を通して、遠藤は「おバカさん」のガストンを通して描き出した「無償の愛」の美しさを再現したのである。

二人の男の生き方の相違が分かる場面を一ヶ所ずつ紹介しよう。まずは、鮎川。桜島の土地買い占め情報を得た銀子は、遅れてはならじと店の常連である鮎川に資金を出させようと目論んだ。かねてより銀子を口説き落とししかつた鮎川は易々と資金提供に応じ、銀子とホテルにしけこむ。

「あたしにリードをとらしてよ。でなきゃ、いやなの」

「わかったよ」

「じゃ、一寸、バス・ルームを使いたいわ」

頬に例の皮肉な微笑をうかべて銀子は鮎川のそばを通りぬけると、部屋づきのバス・ルームにすべりこんだ。

鮎川は閉じられた扉のなかから湯がほとぼしる音をききながら、子供のように胸をときめかしていた。やっとあの女の肉体を自分のものにすることができるのである。今まで数多くの女性を遍歴した彼だったが、今日は初めて恋人とホテルにきた青年のような動悸を感じるのだった。

(第十二章 竜巻)

丁度、折も折、典子は医師と相談の上、手術に踏み切る決意をしたところであった。早速夫の会社に電話を入れると、若社長は外で誰かと食事中で不在だと担当がいう。

典子はなにか張りつめていた体の力がぬけるような気で受話器をおろした。自分が今、手術という大きな試練を決心した時、夫はだれかと食事にかけている。そのちがいが彼女には無理とは知りながら恨めしかったのである。

(第十三章 湖の風)

実際には食事などではなく、鮎川が念願かなって真昼間から銀座のママ銀子と性関係を結ぼうとしていることを読者は知っているわけである。一方、鮎吉は既に、鮎川の代理人を装って、典子に花束を届け、ハンケチを届け、オルゴールを届けている。初めての見舞いを決意し、花束を抱えて出かけた時の鮎吉の思いはこうだ。

見舞いにいくー

もちろんこれは一方的な訪問だった。あの人は彼のことなど知らない。センプキ屋の店さきで苺の箱を懸命に差しだしたニキビ面の少年のことは、ほんの一片も彼女の記憶の闇のなかには残っていないにちがいない。そしてまたその少年がいつまでもその時の自分の微笑んだ顔を忘れずに憶えていると知ったら彼女はびっくりするにちがいない。

鮎吉はもちろん、それを知っていた。そして彼は自分があの人になにかを願うなどとは毛頭考えていなかった。

もしこれが思慕の情とよべるなら、まことにあわれな思慕の情だった。しかし何らかの形で相手から報酬をねがう恋とはちがって、鮎吉は髪の毛一すじほどもあの人からそれに応えてもらおうとは思っていなかった。ただ、鎌倉の海の浜からあの人寝ている病室の小さな窓をじっと見てくるだけでいい。それだけでよい。それ以上はなにも望まない……。

(第八章 紅色の貝)

後に遠藤が純文学小説においても、大衆小説においても、エッセイにおいても、繰り返し繰り返し描いた「同伴者としてのキリスト」像、つまり、具体的で有効な支援はできなくとも、苦しんでいる人の傍らに寄り添うことが私の全てだという人間像の原型がここにある。

いくたびか見舞いの品を贈り続ける鮎吉を見て、読者はなんとかしてそれらの贈り主が鮎吉であることを典子が知るチャンスはないものかと期待し、その一方で鮎川の裏切り行為を憎む。このままでは典子が浮かばれない。遠藤の演出が光るところである。そしてついにその日が来る。この場面は、この論文の主題である遠藤の自然描写が見事に展開している。その詳細は最終章に譲るが、ここでは、それに先立って鮎吉の存在を知ったときの典子の反応が極めて抑制的に描かれていることを述べておきたい。

「あなたでいらっしゃいます？」

「へッ」

(中略)

「あたしに……いろんな、贈物をしてくださいましたの、あなたですの」

(中略)

どうやら悪い青年ではないらしい。それならば何故自分にああした贈物を送ってきたのだろうと典子はたずねようとした。

(中略)

「何処かで、あなたにお眼にかかったのかしら……どうして見も知らずのわたしにあんなに御親切に色々な贈物をしてくださるのですか」

(中略 鮎吉は、典子を見初めた折の事情を説明した。)

「そうだったかしら……忘れてしまいましたわ」

典子にとっては何でもない言葉だったが鮎吉は哀しそうな眼をしてこの返事をうけとめた。

(第十三章 湖の風)

かつて銀座の一流フルーツパーラーの娘として育ち、今は大会社の若き副社長夫人として暮らしている典子は、あくまでも上品で、楚々とした女性である。しかし、類まれなる鮎吉の行為が、純情にして切なき男心の表れとして受け止めることはできない。ましてやその行為に応えることができない。「色々ありがとうございました」という、この日最後の言葉が精一杯なのである。これは読者としては実に歯がゆい。しかし、もしも典子が鮎吉の行為を、単なる善意ではなく、恋心として受け止め、それに応えようとしたらどうなるであろうか。

歯がゆいけれども、そんな展開はあってはならないと感じるのも読者の思いである。遠藤は鮎吉自身にそのことに気付かせ、こう言わせている。

この数年のあいだ、自分が忘れることのできなかつたセンプキ屋の思い出を、この人はもう記憶の何処にもとどめていない—そう知った時、鮎吉はやはり寂しかった。

それは自分一人が懸命になっているのにその相手が応えてくれないむなしい努力にたいする寂しさだった。

しかし、考えてみれば、この人にそれを充たすのを要求することは無理な話だった。彼女にとっては二人の学生が葎を売りにきた過去のある日の小さな状況は他の日常茶飯事と同じようなものにすぎなかつたからである。

(第十三章 海の風)

常識外れのお人好し鮎吉、常識外れの野心家ドクダミ熊坂、常識外れの色仕掛け悪女銀子に加えて、不倫亭主鮎川らが離合集散を繰り返す中で、遠藤は典子一人に常識とはこういうものだと読者に納得させる役割を担わせている。そう私は読み取った。

4 「ヘチマくん」における自然描写の特質

ではここから、この作品における自然描写について論究する。一年前に論じた大衆文学第一作「おバカさん」においては、

主人公を見守る役の隆盛・巴絵兄妹＝おおむね太陽・晴天。

主人公の信念を映し出す鏡役の殺し屋遠藤＝おおむね雨・霧。第一の殺しの場面は晴天。

主人公ガストン・ボナバルト＝おおむね夜空・星。

といった自然描写の描き分けが行われていた。

二年前に論じた大衆文学第三作「私が・棄てた・女」においては、主人公森田ミツの健康や心理状態に応じて、天気の変化が描かれているが、

森田ミツ＝霧雨

という自然描写が多く、それがミツの悲しい人生を象徴していた。

こうしたことを根拠として「登場人物に応じて自然描写を振り分けたり、登場人物の状況に応じて自然描写に変化を持たせたりするという手法は、遠藤周作の表現技法面の根幹をなすものであると考えてよい。」と、私は一年前に結論付けた。(常葉大学短期大学部紀要 第四十六号)

大衆文学第二作「ヘチマくん」においては、前後の二作品に比べると、自然描写は少ないが、

ヘチマこと鮎吉＝晴天

という描写が目立つ。これは良く言えば善良で呑気で屈託がなく、悪く言えばお人好しで鈍感でぼけている鮎吉のキャラクターをよく象徴している。

自然描写が前後の作品と比べて少ない理由の第一は、この作品に東京の夜の銀座や、そこに跋扈する魑魅魍魎のような男女の生きざまがしばしば登場するからだとは私は考える。「おバカさん」においては、同じ東京の山の手、特に住宅地がしばしば描かれ、ガストンが星を

眺めて我が人生を思うという設定が自然なものとなっていた。一方、「ヘチマくん」においては銀座のネオンが描かれ、星は描きようもない。最終章で一度描かれているだけである。

理由の第二は、小説における主人公の描写ウエイトの違いによるものである。「おバカさん」や「私が・棄てた・女」においては、小説の後半が主人公、副主人公の生きざまの描写に絞られ、おのずとそれに合わせた自然描写が登場する。しかし、「ヘチマくん」においては、主人公鮎吉の他、ドクダミ熊坂、悪女銀子、ヘチマの初恋の女典子の四人が主要人物としてほぼ最後まで描かれ続けている。この四人はいずれも「主役」に近い役割を遠藤から賦与されている。

したがって、鮎吉＝晴天、とは言いつつも、遠藤はストーリーの展開に応じて、晴天や雨天を自由自在に当てはめた設定を施したものとみてよい。

5 ヘチマくんと晴天

何はともあれ、最も主要なる自然描写である、この点について具体例を挙げながら説明していこう。

最初に鮎吉に晴天が描かれるのは、大戦中の学生時代のことである。苺の闇売りで金稼ぎをしようという寮の親友ドクダミ熊坂の計画につき合わされて、神奈川県の子供たちまで苺を仕入れに行く朝の場面であった。

「今ごろ苺のほしくない人がおるか。こりゃ、アッというまに蟻のように群がってくるぜ」「警察につかまるで……」

陽光をまともに受けた鮎吉の不安げな顔を、熊坂は大いに軽蔑して見おろした。

(第一章 チャッカーリとモッサリ)

苺を手に入れて東京まで戻って来たものの、銀座の一流果物店でも買い取ってはもらえない。鮎吉は、偶然見つけたその店の副社長のお嬢さん（後に典子と名前が判明）に苺をただで挙げてしまった。怒るドクダミに対し、寮に帰った鮎吉は満足感に包まれる。それがさわやかな青空とともに描かれるのである。

当の鮎吉は、暈にゴロリとねころんだまま、なにか夢見るような眼で、窓のむこうの青空をぼんやり眺めているのである。

時は五月だった。薫風寮の中庭には、花がもう散って、すっかり青葉の茂った桜の樹に文字通り五月の風が心持よくふいていた。そしてそのむこうに青い空がひろがり、青い空に羊の毛のような綿雲が二、三片、ぼっかり浮いていた。

(中略)

青空に白い巻雲がながれていた。その白い巻雲がまるで粉雪のように眼にしみる。空の碧さが消えると、鮎吉のまぶたの裏であのお嬢さんが微笑みながらこちらを向いているのである。

(第一章 チャッカーリとモッサリ)

ここは第一章の最後の部分であり、「おバカさん」を読了後に「ヘチマくん」を読んだ読者の中には、ここで早くも「鮎吉＝晴天・青空」という、主人公と自然描写の組み合わせを感じ取った人もいたことであろう。

鮎吉と晴天の組み合わせは、この後何度も描かれる。その一つを紹介しよう。かつて蓐を挙げたお嬢さんが典子という名であり、現在病気で入院中だということを八年後の今になって知った鮎吉は、鎌倉の病院へ見舞に行く。喜びに燃えて出発した鮎吉は、あの人が自分を覚えていてくれる可能性はないと感じ、途中で戻ろうかとも思いつつ、意を決して目的地を目指す。

空は日曜日にふさわしく晴れあがっていた。鎌倉に行くには持ってこいの天気だった。

(中略)

駅前の広場に白い陽がまぶしく当たっている。

(中略)

鮎吉は病院の方に向かって歩きながら、その焼けた木片や海草の所々に散らばっている浜に時々、赤くキラッと光るものをみた。

拾いあげると、それは紅色の小さな貝がらだった。

陽の光にその貝がらは真珠のように赫くのである。

鎌倉のひるすぎ、陽がもの憂く押し寄せては砕ける波にキラキラと光っていた。

(第八章 紅色の貝)

八年前に一度会ったきり、しかも典子は男の名が鮎吉であることも知らない、さらには典子は人妻となっている。そんな状況では、普通の男なら躊躇するところである。さすがの呑気男鮎吉も、そのことに気付く。上の場面の最後の描写は、輝く太陽と、もの憂い波の描写が鮎吉の期待と不安を見事に象徴している。遠藤は、午後一時から三時までは安静時間で面会はできないという設定を用意して、鮎吉に見舞いの花束を看護婦に託すという行動を取らせている。

鮎吉はその後数回、典子の病院を訪ね、典子の夫の会社の者だと偽って見舞いの品を届ける。一方典子は、その見舞いの品が夫の選択したものではないと見抜き、贈り主を突き止めたいと願う。次は二人が八年ぶりに再会する劇的な場面である。見舞いの本を看護婦から渡された典子は、訪問者がまだ去ったばかりと聞き、その人物を求めて浜辺を追った。

彼女は病室に戻ると、サン・グラスをかけガウンにサンダルシューズをはいて、急いで病院を出た。

空は晴れていた。

病院をとりまく松林を通りすぎると、白い砂地にそれらの松の枝の影が鮮やかに映っていた。海の風と波の音とはこの松の幹と幹との間を爽やかにながれこんできた。

(中略)

「あのォ……」と典子はたちどまって声をかけた。

鮎吉はびっくりして背後をふりかえった。この時、海風が彼の体を吹きぬけていった。

耳もとの爽やかな声は聞いたことがあった。かつてあのセンブキ屋の店かど以来、彼がこ

のがめつい世の中で途方にくれるたびに思い出し、心にうかべ、囁みしめてきた声だった。
そして—
白い浜から反射する陽の光をうけてその女性はスカーフをあごに結びながらそこに立っていたのである。

(第十三章 湖の風)

この後、典子が鮎吉の訪問意図を尋ね、鮎吉がそれを述べる。そして典子が礼を言って去ってゆくまでに、輝く太陽や、それに照らされた砂浜や貝がらが三度描かれている。また、この場面は、波と海風の描写も豊かである。「海と毒薬」「沈黙」など、遠藤は明るい海、暗い海の描写も、しばしば活用している。この論文は自然描写の中でも天気の詳細な論考をねらいとしているので、この点についての深入りは避ける。機会があれば探してみたいところである。

その後、鮎吉は、鹿児島県桜島の古市、辰島集落の土地の買い占めと転売による儲けをたくらむドクダミ熊坂に協力を求められ、現地に出向く。彼らは鹿児島市に一泊、辰島に一泊という旅程で現地住民代表との交渉に臨むのだが、この二泊三日間は快晴である。陽射しの描写回数も半端ではない。しかし、紙面の都合で、これらの引用紹介は一切省略する。「第十五章 炎」から「第十九章 復讐」の前半までを読めば、一目瞭然である。

6 ヘチマくと雨

この鹿児島県での場面よりも私が注目したいのは、鮎吉の最後の典子見舞いの場面である。ここでは一転して霧雨の描写が登場する。鹿児島県から東京に戻った鮎吉は早速典子の病院を訪ねた。しかし、その日は典子がめでたく退院する日であった。しかも鮎吉が着いた折も折、典子は夫が差し向けた迎えの車に乗って消えてゆくところであった。

雨はやんでいたが、空には灰色の雨雲がかさなりあい、海はかなしくあれている。遠い沖に一隻の舟がそれでも浮かんだり、沈んだりしている。
松林のなかに、屋根のぬれた病院がかいま見えた。

(第二十章 虹のように)

鮎吉が典子の病院に向かう場面である。今まで鮎吉が病院を訪ねた時はすべて晴天であったが、ここでは一転して暗い雨模様である。次は受付の女から典子の退院を鮎吉が教えられる場面である。

「ほら、あそこに車が見えますわ」
女性は、道路が見おろせる構内の一角まで来ると、そこから雨の名残りに黒く光ったアスファルト道路を指さした。

(第二十章 虹のように)

走り出した車の中から典子は石段の上に佇む一人の男を認識する。しかし、一瞬のことで

もあり、離れていたこともあり、典子はそれが鮎吉であることまでは認識できなかった。せつないが見事な設定である。典子は迎えの社員に夫のことを尋ねた。

「主人は？」

典子は雨雲の下にくろく拡がる稲村ヶ崎の海を眺めながらたずねた。

(第二十章 虹のように)

「ああ」

彼女は思わず、嬉しそうな声をあげた。

「どうなさいました」

びっくりして社員がこちらを振りかえった。

「なんでもないの。ただ、久しぶりに外をみたものだから……嬉しくて……」

雨が車の窓を少しぬらしはじめた。

その雨の中で—

鮎吉はポケットに手を入れたまま、ぼんやりと棒のように立っていた。長い長い努力が今、やっと終わったような気がする。

(なにを、お前は寂しがってるのや。なにをお前は文句をいうことがあるのや。丈夫になったあの人はもと通り、幸福になるやろ。それで充分やないか)

霧雨でその長い、間のびのした顔をぬらしながら彼は、足をひきずって病院の門にむかった。

(第二十章 虹のように)

心の一方では、典子がいつまでも入院してきてくれて、会いに来れることを期待してしまう鮎吉の正直な思い。また一方ではそんな醜い心を叱りつける鮎吉の実に素朴な倫理観。一言の独白の中にそれがよく描かれている。雨の描写の中でも典子の心はかつての少女時代のようにはずむ。一方、霧雨に濡れる鮎吉の姿は読者として切なさを感じる。しかし、その一方で鮎吉＝晴天という設定を捨てて、雨天にしたのは実に納得がいく。

この霧雨を伴う人物描写は、大衆小説第一作「おバカさん」の殺し屋遠藤で使われた手法である。また、後に大衆小説第三作「私が・棄てた・女」の森田ミツの描写で、さらに徹底してゆくことになる。こうして見ると、遠藤周作の初期大衆小説の描写手法として、星・晴天・雨という三作の相違点もさることながら、雨の描写という共通点も興味深いものになってくる。

おわりに

「はじめに」で私は次のように述べた。「私が既に論じたような『おバカさん』のガストン・ボナパルトと星、『私が・棄てた・女』の森田ミツと霧雨といった徹底した描写はない。(中略)しかし、ここぞという場面で見事なまでの晴天の描写が用いられている。それは後述するように主人公へチマこと豊臣鮎吉と、その憧れの女性典子との再会の場面でクライマックスに達すると言ってよい。そしてまた、全体的には晴天の明るい描写が目立つ中で、失業し

てさまよう鮒吉や、典子と会えなくなった鮒吉などには雲や雨の描写をぶつけてくるなど、遠藤の自然描写は、大衆文学第二作を以て、かなりの余裕を見せてきている。」

拙文の「4」から「6」において、かなりの引用を用いながらそのことを証明してきたつもりである。併せて、二度目の大衆小説、そして新聞小説において、遠藤周作がいかに余裕を持って巧みにストーリーを構成しているかということも述べ、それを作家的成長だと指摘してきた。

その成長とは、作家が持つ創作動機、つまり小説に描いて世に問わずにはいられない作品の主題に関してのみならず、小説の表現技巧、たとえば自然描写の活用の仕方といった面をも含めての私の見解である。

今回の論考でも、「ヘチマくん」に使われた自然描写が、後の代表作と言われる「沈黙」等の純文学作品に、いかに発展してゆくかということを書きたい衝動に何度も駆られた。機会があれば今回出来なかった、その論考を文章で示したいものである。

また、1996（平成8）年に遠藤周作が亡くなって、はや20年。純文学小説と比べ、「ヘチマくん」のような大衆小説は一段と価値の低いものと見られる傾向があるだろう。とりわけ大衆小説第一号の「おバカさん」や、映画化もされた「私が・棄てた・女」と比べ、「ヘチマくん」は書店でも入手しにくくなっている。やがてはこの小説の存在もごく一部の遠藤周作ファンにしか知られぬものとなってゆくに違いない。さればこそ、この論文が、後の世代の誰かの目に止まってくれぬものかという、淡い願いも浮かんでくる。

一、二年前の論文でも述べたように、「この作品が読者の心を打つのは、作者がどんな巧い書き方をしているからなのか」という、作品の作り方と出来栄を論ずる視点による作品分析を、私は今後も続けてゆく。遠藤周作は後に昭和52年発表の小説「悲しみの歌」の中でガストンを再登場させている。「ヘチマくん」に続いてこの作品についても分析してみたい。これが当面の計画である。また、「海と毒薬」の中では下っ端の医師研究生であった勝呂のその後の姿を、いくつかの小説で描いている。それらの小説における自然描写の見事さを、いつか論文で紹介できたらと考えているところである。

参考文献（順番は著者・代表編集者のあいうえお順、次に雑誌とした）

- | | | |
|-------------|--------------------------------|--------------|
| 江藤 淳・他著 | 「群像 日本の作家 22 遠藤周作」 | 小学館 |
| 奥野健男 筆 | 「ヘチマくん」解説文 | 角川文庫昭和48年8月版 |
| 笠井秋生・玉置邦雄 編 | 「作品論 遠藤周作」 | 双文社出版 |
| 笠井秋生 著 | 「遠藤周作論」 | 双文社出版 |
| 上総英郎 著 | 「十字架を背負ったピエロ ～狐狸庵先生と遠藤周作」 | 朝文社 |
| 広石廉二 著 | 「遠藤周作のすべて」 | 朝文社 |
| 藤田三男 編 | 「追悼保存版 遠藤周作の世界」 | 朝日出版社 |
| 雑誌 | 「国文学 解釈と鑑賞 1975年6月号 遠藤周作の文学世界」 | 至文堂 |
| 雑誌 | 「国文学 解釈と鑑賞 1986年10月号 特集 遠藤周作」 | 至文堂 |

